

し。城跡あり。』と見える。

カミキタ 上井田 鹿島郡井田の内の小字。

カミヲナホタケ 神尾直武 初名左太郎、

後主計・數馬。秀直の二男。寛永三年三歳にして父の遺知五百石を分與せられ、十五歳の時前田光高の小々將となり、弱冠にして二百石を加へた。正保中馬廻組に列し、千三百石(内五百石與力知)を加へ、明暦三年馬廻頭に進み、寛文三年大小將頭に遷り、延寶五年馬廻頭に復し、大小將頭を兼ね、七年四月十五日前田綱紀に從行し、江戸城の玄關に於いて頓死した。享年五十七。

カミヲナホツグ 神尾直次 幼名竹松、後

主殿助と稱した。秀直の嫡男。寛永三年六歳にして父の遺知の内二千石を襲ぎ、十一歳の時千石を加へ、弱冠また千石を増し、次いで前田利常に從つて小松に居り、老臣となつた。後祿増して七千三百石を受け、正保元年金澤に歸り、家老に進み、翌二年歿、享年二十五。

カミヲナホヤス 神尾直保 通稱伊兵衛。

主殿助秀直の三子、慶安四年召出されて十五人扶持を受け、承應二年三百石に進み、御使番・御小將番頭・御中小將番頭に歴任し、寛文五年二百石を増し、御先簡頭を経て元祿十四年正月廿五日七十八歳を以て歿した。

カミヲヒテナホ 神尾秀直 初諱長光、主

殿助と稱した。之直の嫡男。前田利長に仕へて近侍となり、後父の祿を襲ぎ、大坂兩役に從軍し、元和五年更に父致仕後の祿二千石を加へて一萬千石を受け、寛永二年歿した。年三十一。

カミヲユキナホ 神尾之直 幼名五郎八、

後に鬪鬪と稱した。父は尾張の人堀田安休。神尾甚右衛門の養子となつたもの。之直前田利長に仕へて近侍となり、千石を賜はり、後父の祿を併せて三千石を受け、天正十三年越中鳥越の役に功を立て、又大聖寺の役に從軍し、利長の退隱と共に高岡に從うて老臣となり、祿を増して九千石に至つた。次いで大坂の役に從軍し、凱旋後退老して宗是と號し、別に隠居料二千石を受けたが、元和五年病に罹り致仕して京都に住んだ。後寛永十八年に至り松本城主堀田正盛に仕へて城代に任ぜられ、五千石を賜はり、二十年に歿した。享年七十九。

カムメノイスキヒコジンジャ 神目伊豆伎

比古神社 鳳至郡藤波に鎮座する。もと藤波・藤瀬の境界なる嶺上に鎮座したといふ。式内等舊社記に、『神目伊豆伎比古神社。式内一。座。諸橋郷藤波村神目谷内鎮座。稱神目宮。或云祭神迦邇日宿王也。』と見え、又能登誌には、『藤波の村家より十七町餘山人に神目宮といふ社あり。則延喜式の神目伊豆伎彦神社の正跡なりといへり。境内に淺黄櫻の古木あり。則神木にて八重櫻ともいふ。此所を神目の谷内とも小又の谷内といふといへり。』とある。この社は今神目神社というてゐる。この諸橋郷内に神目伊豆伎彦神社の額を打つたものは、藤波・前波・沖波の三ヶ所にあつた。

カムスギノイズムヒメジンジャ 神杉伊豆 牟比咩神社 鳳至郡本江・仁行人會地に在る。大幡神社は、もと神杉伊豆牟比咩神社といひ、初は仁行字奥長湖の山中神谷内に在つたが、次に仁行字古屋に轉じ、更に本江・仁行人會の大幡に移つたもので、明治六年大幡神社と

改稱した。式内等舊社記に、『神杉伊豆牟比咩神社。式内一。座。三井郷本郷村鎮座。今稱大幡社。或云大日貴命之妃神也。舊傳云。往昔三井郷内十五村之惣社。應永廿一年棟札傳來。』と見え、又能登名跡志には、『本江村近し。神杉伊豆牟比咩の神社立ち給ふ。一郷の宗社にて、三井の大幡祭として三月廿一日・廿二日也。本江村・渡合村・中村・仁行人村四ヶ村に當屋ありて賑しき祭禮也。神主は山崎氏にて興德寺村に在り。』とある。本社所藏應永廿一年の棟札には神杉大幡伊豆牟比咩大明神とし、享保元年の棟札には大幡神杉伊豆牟比咩神社と記す。

カムスギノイズムヒメジンジャ 神杉伊豆

牟比咩神社 鳳至郡中居に鎮座する。神社號録に、『神杉伊豆牟比咩神社。神杉也。は加武須岐乃と訓むべし。伊豆牟比咩は假字也。○祭神明也。神主山崎氏。中居村に在す。今六所明神と稱す。』とある。

カムリガダケジヨウ 冠ヶ嶽城 寶永誌に

石川郡宮樺庄小原村持山の内に冠ヶ嶽といふ古城跡があると記してゐる。越登賀三州志故墟考には、冠ヶ嶽は宮樺庄大平澤庄の山上にあり、地方人は雄夫久佐山といひ、古記に小原山城といふ者は是であらうとある。小原と大平澤は山を挟んで相隣つて居る。文明六年狩野伊賀が小原山龍藏寺で一揆と鬪争したことの三宮古記に見えるものも亦これであらうか。

カムリダケ 冠ヶ嶽 ↓ミノウザン 三輪山。

カメイシ 龜石 石川郡藤江の宮腰街道に在る。越登賀三州志に、寛永十一年玉泉院丸に假山を築いた時、能登から龜石の石を運び

來つたが、こゝでその首が鬪落し、その胴部も割れたから放棄したものであるとある。今は大石というてゐる。

カメイハ 龜岩 羽咋郡浦にある。寶曆の

書上に、『浦村領かめ石。往古よりかめ岩と唱、海際に大石有之。』と見える。

ガメザカ 龜坂 金澤小立野に在つて、或

は龜坂とも書き、がめ坂と呼んでゐる。がめ坂の名稱の由來は詳かでない。

カメダウチ 龜田氏 ↓ミヤタケヤ 宮竹

カメダオホスミクンコウシヨ 龜田大隅勳 功書 一册。寛永五年龜田大隅高綱の筆記に係る。天正中柴田勝家越前入國の際一揆が起つたのを、當時溝口半丞といつた大隅高綱が十六歳で一番鎗の高名をしたことから、慶長・元和の大坂城攻に勳功を顯したことを記してある。

カメダカゲタフ 龜田景任 宮竹屋の分家

六代。金澤川南町に住んで酒造を業とした。林翼(屋山)の二子で、龜田甚右衛門淨品の嗣子となつたもの。初名文助、後甚左衛門、隱居の後影次郎・七右衛門。諱は景任又は任、字は舜年、商齋はその號である。俳句・和歌・漢詩並びにこれを能くし、春日山燒の起業にも從うた。嘉永元年六月廿五日齡八十四を以て歿。

カメダカツトヨ 龜田勝豊 ↓カメダユル 龜田小春。

カメダカツノリ 龜田勝則 宮竹屋の本家三代。通稱伊右衛門・後甚右衛門。父甚左衛門道喜の子。勝則の時片町に住して藥種を業とし、藩醫岡部養叔の處方に從うて烏犀園。